



富士で、オリジナルのブレーキパッドを開発中の田中ミノル氏。走行を終え、装着していたパッドの改善点をスタッフに指摘中。

ミノルインターナショナルアプローチ

# 足のプロフェッショナルが開発する 当然発想のピンポイント・ブレーキパッド

あのHYPERCOやbillionを提供する田中ミノル氏が、新たにブレーキパッドの開発を行なっている。ブレーキの使い方を正しく伝えたい。今のユーザーなら、これまでの“神話”にとらわれず、自分自身のこととして分かってもらえると思う。そのうえで、正しいブレーキパッド製品と選択環境を提供したい。と、語るのである。

文:マーク 清原 / 写真:アイドラーズマガジンフォトサービス部

取材協力:株式会社ミノルインターナショナル 東京都世田谷区等々力2-1-2 3F tel.03-5706-1888 <http://www.hyperco.jp/> <http://www.billion-inc.co.jp/index2.html>





## 発端は田中ミノル氏の疑問だった

アイドラーズマガジンで好評をいただいている企画が、田中ミノル氏のドライビングレッスン。前号で紹介した「タテ+ヨコ=100の法則」でも詳しく紹介しているように、ドライビングの善し悪しの99.99%はブレーキングで決まるのだ。ブレーキ操作がいかに重要なことであるかは、その前号を見ていただきたいが、ブレーキの踏み方と抜き方、そして、ステアリングとの関係を「タテ+ヨコ=100の法則」として定義したものである。要は踏力のコントロールである。ということは、コントロールできるブレーキパッド自体が、きわめて大切なものだといえる。しかし、現在リリースされている多くのブレーキパッドは、車種や重量、仕様が異なるにもかかわらず、摩材は同じ。また、同一車種で大小の径が設定されたブレーキローターにもかかわらず、パッドは同じということさえざらだ。これはちょっとおかしいという疑問が田中氏に芽生えたのである。この疑問を解決するために開始されたのが、田中ミノルブランドによるブレーキパッドの企画・開発だった。すでに2年前のことである。

「例え同じクルマでも、チューニング方法や使うタイヤによって、適正なブレーキパッドは異なります。さらに、ドライビングスタイルや前後バランス、気温などを考慮すると、一般ユーザーが最適なパッドを見つけることは、非常に困難なことだと思います。そのため、一般ユーザーが使っているブレーキパッドの多くが、利き過ぎのものを選んでいます。前号でもお話しましたが、利き過ぎるためにフロントがナーバスになってしまい、理想のポイントよりも手前でブレーキをリリースしてしまい、再びブレーキを踏むという状況です。これには技術力という面もありますが、正しいブレーキパッドのチョイスができていないことの方が大きいですね」と田中氏は話す。

これは非常に的を射た話だ。一般ユーザーにとって最も難しいことは、自分に合ったブレーキパッドを見つけること。いろいろなパッドの装着経験者ならいざ知らず、初めて社外パッドに交換してドンピシャだったということは、得てして少ないはずだ。だから、仲間やショップ、雑誌などから情報を得て、まるでギャンブルのようなパーツチョイスをしている人も多いのではないだろうか。「だから自分でつくろうと思ったのです。できるだけ失敗のないチョイスでラップタイムを縮めることが可能なものを」。現在、田中氏が開発を進めているブレーキパッドは、全て自らがサーキットでテストを実施し、1車種につき20種類のパッドを用意するというもの。さらに、その中から田中氏がベストなものを明確に示すというものだ。「まずは、20種類の中からボクが勧めるブレーキパッドを基準にしてもらおう。これを最初に使ってもらって、それでも満足しないようだったら違うものを選択してもらえばいい。ただし、ボクがベストとしたブレーキパッドは、とことん走り込み、データを蓄積し、何度も摩材の変更を繰り返して出来たものです。ボクがベストとした製品以外でラップタイムを縮めることができるなら、その運転技術は相当高いと自信を持って良いでしょう」と笑うほど、これまでのブレーキパッドベンダーにはみられない強い姿勢を打ち出している。

耐摩耗性や温度など、その開発方法はレーシングカーと全く同様だ。ちなみに、パッドの製造メーカーはWINMAX。国内ブレーキパッドの老舗であるWINMAXに製造を委託した理由は、高性能なことはもちろんだが、独特の製造方法により、少数製作が可能であったことも大きいそうだ。田中氏のパッド開発は、とにかくいろいろなパッドを数多く試すために、量産しかできないメーカーとのコラボは不向きなのだ。

## プロドライバーのドライブ感覚でつくる最適設定

一般ユーザーが使って試すという行為を、田中氏が代わりに行ない、ベスト20をセレクトする。その中から田中氏が勧めるベストなパッドを教えてくれる。言うなれば、田中氏はブレーキパッドでソムリエ的な存在となったのだ。パッドを製作して販売するという面では、非常に手間暇がかかることでとても効率的だとは思わない。しかし、だからこそ田中氏はこのちょっとやっかいな手法で、パッド開発を行なっている。「大きなメーカーでは、このやり方はできないはずですよ。だから始めたのです。ちなみに、多くのユーザーは利き過ぎるブレーキパッドをチョイスするので、ボクがベストとしたブレーキパッドを使うと、制動力に不安を持つ場合があるかもしれません。でも、安定したブレーキングとリリース時のコントロール性に優れたブレーキパッドがどのようなものなのか、使えば必ず分かるはずですよ」。

筆者は、これまでに多くのブレーキパッドに関して取材をしてきた。材質や製造方法を知ることもし役立つ。しかし、自分に適したブレーキパッドはどれかと聞くと「この辺りですかね」という曖昧な答えがほとんどであった。結局のところ、使って試す以外に正しい選択方法が無かったのだ。ところが、田中氏が開発しているものは違う。そのクルマでラップタイムを縮めたいのなら、これを使えという明確な答えを出してくれた。しかし、いつも田中氏がそばに付いてくれるわけではない。そこで、ウェブサイト上で条件入力を行えば、最適を提案するような環境を提供するのだという。

“新発想、しかし、当然発想”の“ピンポイント・パッド”がハイパコのミノルインターナショナルから発売される予定だ。



代表取締役 田中 ミノル氏

企画・開発にあたっては、彼自身ができるだけ多くの車種の乗り込み、実践的に行なうという。その内容は、1車種につき約20種類以上の試作パッドを用意し、さらに絞り込むというのだ。